附属函館中　ＣＢＴ学習履歴活用研究

学びの自己調整力育成

学級活動等でＳＳＴやＳＲ

【函館発】道教育大学附属函館中学校（中村吉秀校長）は本年度、ＣＢＴ等で得た学習履歴を活用し、生徒の自らの学びを自己調整する力の育成に向けた研究に取り組む。ＩＣＴを利活用した各教科での指導に加え、デジタル化したソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）や自らの学校生活を振り返るセルフレギュレーションフォーム（ＳＲ）を学級活動等で導入。教科指導で蓄積された個々の学習履歴を活用し、学習状況や生活を振り返る場を設定することで、生徒の自己伸長に必要な課題の発見や学習計画力の育成を目指す。

国のＧＩＧＡスクール構想によって、紙媒体では把握しきれなかった生徒の学習履歴や学習評価の連続性・関連性などがデータとして取得できるようになった。国がことし3月に中間報告した「教育データの利活用に関する有識者会議」では、テストの点数等の「定量的なデータ」だけではなく、児童生徒の主体的に取り組む態度や成果物、教師の見取りなどの「定性的なデータ」も教育データの対象と定義。一人ひとりの児童生徒の状況を多面的に確認し、教育活動の各場面において個別最適な支援を可能とすることを利活用の原則としている。

同校では、4年度から2ヵ年計画で「1人1台端末環境における指導と評価の一体化の実現」をテーマにＣＢＴの利活用に関する研究を開始。

各教科の授業ではＣＢＴ形式の問題を適宜実施して生徒を評価するとともに、個々の実態に応じた助言など個別最適化を意識したフィードバックを取り入れている。

これまでの実践で、生徒が扱う端末のグーグルクラスルームには、各教科の学習履歴や学級活動、部活動など多様な教育活動の記録が十分に蓄積されてきた。教諭員と生徒のやりとりや個々の学習到達度なども振り返ることができる状態にある。

こうした学習履歴を次段階に生かす研究として、本年度は生徒の「自己調整力」に視点を当てる。

具体的には、デジタル化したＳＳＴを作成し、月末に定期的に実施。

現在、個々に紙ベースで実施している長期的な学習目標に加え、生活目標を細分化したＳＲフォームを導入。1週間に1度グーグルフォームで振り返りと見通しを持たせる場を徹底するほか、生徒はグーグルキープのチェックボックス機能を活用してタスク管理を行う。

学習評価の変容についても検証。生徒が自らの学習を調整しようとする側面や粘り強く取り組む姿勢などを見取る「主体的に取り組む態度」の評価に重ねるとともに「知識・技能」「思考・判断・表現」の向上にも役立てる。

研究主任を務める金子智和教諭は「〝勉強の仕方が分からない〟という生徒が多くいる。こうした悩みを抱える生徒に対し、どのような手だてが有効かという疑問が浮かび上がった」と振り返り「生徒が自己調整する力を身に付けることで、自らの学びも客観的に見つめながら前進し続けるようになるのではないか」と分析する。

黒田諭副校長は「デジタルの学習履歴を〝自己を見つめる道具〟として活用することで、自立した学習者の育成につなげられれば」と期待する。

同校の本年度研究大会は11月2日午前9時からオンラインで開催予定。9月中旬にも2次案内を公開する。

札幌啓成高　ＳＳＨ英語特別講義

声の大きさが一番大切

コミュニケーションの心得

札幌啓成高校（斉藤光一校長）は6月21日から2日間、同校でＳＳＨ科学英語コミュニケーション特別講

年生320人、2年生40人、3年生75人を対象に学級ごとに行った。

1年生対象の講義では、ｏｎｅからｔｅｎまでの数字の発音をも